

寺山修司「チエホフ祭」再考

—煙草くさき国語教師が言ふときに明日という語は最もかなし—

大 島 薫

はじめに
ゝ問題の発端

『寺山修司全歌集』（風土社、一九七一（昭和五六）年）は、寺山修司（一九三五～一九八三）が生前に出版した「全歌集」である。寺山は本書を出版するにあたって「歌のわかれ」を宣言し、それゆえの「全歌集」である意義を明らかにした。さてこの『全歌集』に、塚本邦雄（一九二〇～二〇〇五）は「アルカディアの魔王 寺山修司の世界」と題する解説を寄稿している。寺山修司が歌壇にデビューを飾った短歌連作「チエホフ祭」について、寺山修司について、さらには塚本自身も置かれていた「当時の歌壇」を評して的確かつ痛烈である。多少長いが、まず引用しておきたい。

昭和二十九年十一月、彼の十八歳の賭は第二回短歌研究新

人賞特薦「チエホフ祭」五十首として、みづからをサラブレッドに擬し、比類のない爽やかな勝利を獲ちとつたのだ。第一回の中城ふみ子の『乳房喪失』の、死のおひを漂はす華麗な登場のあとだけに、寺山修司のデビューは、作品のサブ・タイトルとした、“青い種子は太陽の中にある”をそのままの、燦燦たる光に包まれた、戦後九年目の希望の象徴であった。老い朽ちようとする韻文定型詩は、まさしくこの寵児の青春の声によつて、一夜にして蘇つた。そしてこの定型詩が“蘇つた”のは、あとにもさきにもこの時一回限りだったのではなからうか。はたまたこのたまゆらの蘇生の幻覚こそ、復活の前の死、後の死をさらに際立たせ、短歌なる定型の業を証すことになったとも言へうか。彼の後に続く数多の若者たちが死にかはり生きかは

り、再び三たびその幻覚を逐ひつつ遂に挫折する経過を見ても、定型の業の深さと、天才の稀有なることをこもこも思ひ沁むのである。さらにつけ加へるならば、その瀨死の閨秀歌人の妖しい揺籃歌も、この十八歳の美少年の五月晴の青春の挽歌も、当時の名エディター、中井英夫の“発見”によつてこそ、はじめて現れ得たものであつた。埋もれた寶石、かくされた花の稀少価値は勿論であるが、それを明るみに引用すには、それを超える稀有の眼がなくては果されないだろう。かつての名エディターが、今日「かつてアルカディアに」の作者として蘇つてゐることも、当然のこととは言ひながら感懐一人である。因みに芥川賞作品、安公房の『壁』は寺山の『チエホフ祭』に先だつこと三年、昭和二十六年であり、石原慎太郎の『太陽の季節』は昭和三十年であつた。

　　篝火を床に踏み消して立ち上がるチエホフ祭の若き俳優
　　蜚声をあげて九月の森に入れりハイネのために学をあざむき

　　籠の桃に頬痛きまでおしつけてチエホフの日の電車に揺らる

　　向日葵は枯れつつ花を捧げをり父の墓標はわれより低し

一粒の向日葵の種まきしのみに荒野をわれの処女地と呼びき

「チエホフ祭」の中のこれら人口に膾炙した作品は、記憶の中でもつねに剪りたての花摘んだばかりの果実のやうにみづみづしい。そして単にみづみづしいのではなく、みづみづしくつくりあげられてゐることに注意せねば、作者が作意をもたぬ歌人をはげしく侮蔑し、(私)性文学は無私に近づくほど、多くの読者の自発性になり得ると考へた、その不敵な生き方、即ち方法を見ぬに等しからう。原典を自家薬籠中のものとして自在に操り、藍より出た青より冴冴と生れ変らせる、この本歌取りの巧妙さ。新古今あたりそのその厳肅な繁文褥礼めいた修辭学を、微笑と共に跳びこえて、これらの作品は輝いてゐる。今は昔、彼が作中人物通りではなかつたと毗を決して短歌のモラルを説いたり、用語に先蹤ありとあげつらつて、博覧ぶりを誇示した頑なな先輩たちを前に、途方に暮れつつ憫笑を以て応へてゐた寺山修司を、私はいたましい思ひにみちて想ひ出さねばならぬ。赤旗を売らずに売つたと歌つたことが、それ自体罪と呼び得たこのうとましい世界に、私は彼より先に住んで耐へてゐたのだつた

「チエホフ祭」は『短歌研究』一九五四(昭和二九)年十一月号(日本短歌社)に「第二回五十首応募作品〈十代作品特集〉特選」として発表された。寺山は十八歳、この短歌連作をもって歌壇にデビューする。塚本は「チエホフ祭」が『短歌研究』誌上に発表されて十七年後に右に引用した解説を執筆したわけだが、「チエホフ祭」は発表された当初、輝かしい評価のみで受け入れられたのではない。周知されているように「俳句の模倣(若月彰は『俳句研究』一九五五年二月号に執筆した「俳句と短歌の間」に「チエホフ祭」に収録される数首について「盗句歴然たる模倣」と評した)である」と批評されたことから、俳壇さらには歌壇からも批判をあびたのだ。『俳句研究』一九五五年二月号には「短歌と俳句」と題する特集が掲載された。この特集において寺山は「俳句作者」と紹介されるが、「チエホフ祭」を対象として「その短歌に表はれた俳句的発想乃至転換法及び同一材を短歌と俳句に扱つてゐる点、其他同じ定型詩としての短歌・俳句の底に共通に横たわつてゐる詩の問題、そして両者個々の性格等」問題視された。この特集に掲載された楠本憲吉「或る「十代」——短歌俳句に於ける純粹性の問題」には、寺山が俳句作者として頭角を現しつつあることを「寺山氏の俳句は厳選を誇る「万緑」にあつては四句級にして「俳句研究」の新

人競詠集に推され、その短歌は全国多数の応募者を退けて美事首席を獲得してゐる」と言及しつつ「根本的に異質のもの(引用者注・俳句と短歌とについていう)であり、その一芸に達することさへ至難の小詩型をば、自由自在にアレンジし鮮やかに二刀流を使ひこなすアンファンテリブルの登場は、久保田氏ではないが「いづれにしても容易ならぬ実験の段階へ踏みこんだような」恐るべき予感がしてくるのである。惟ふに、このやうな現象の成立する所以は私がさきに述べた、散文化“と云ふ名の悪しき水溜りに、歌・俳句ともいつの間にか落込んでしまつたことに帰するのではあるまいか」と述べ、さらに以下の言葉を投げかける。

振り返つて十代の詩人寺山氏に言ふ。繰り返して云ふやうに俳句は公式や符牒ではない。ましてや感覚的な言葉のクロスワードパズルではない。一つの様式が長い時間生き続けて来るとそれは公式的な便利さを生じ、機械的な怠惰を生むことも確かなことだ。その便利な惰性にやすやすと便乗して言葉のクロスワードパズルに耽ることこそ“禁じられた遊び”なのだ。君はその遊びを君自身の手で禁じるべきである。何よりも君自身の行方にかくされた豊饒な未開拓の領域を発見する為

十代の寺山が俳壇で注目されていたことを、そして当時の俳壇を識るにも余りあるが、桑原武夫「第二芸術―現代俳句について」(『世界』一九四六年十一月号)の打撃が著しく、その影響下に「チエホフ祭」そして寺山修司への批判が展開していたことを読み取らせる。一方この特集には寺山も「ロミイの代弁詩型へのエチュード」を寄稿する。寺山は自らを「僕の作者」と呼ぶ「ロミイ」を登場させ「代弁」させることで「歌人たちがメモリアリストのままに歌作することをもつて自己に誠実であるなどと考えているとしたらそれは大間違いではなからうか」記録は自己を決して拓いてくれないしその場のオブジェが必ずしもその場のエモーションを暗示するのに最高のものとはかぎらないのだから」と、歌壇に対する批判を提示しており、またこの特集に提起された問題についても次のように回答している。

ある一人の作者が、いわゆる韻文ジャンルを駆使できることの必要を前提として、一つのエモーションを俳句と短歌の両ジャンルで作る場合がある。たとえば多くの作者の場合がそうである。

チエホフの忌頬髭おしつけ籠桃抱き

という俳句の中でのぼくはやつぱり窮屈でしょうがなかつ

た。

ぼくは永い間、多くの作者寺山修司にこのことへの不満をぶちまけつづけたが、彼はやつとそれを次の歌に展開させてくれたのであつた。

籠桃に頬いたきまでおしつけてチエホフの日の電車にゆるらる

こういう意味では

桃太る夜はひそかな小市民の怒りをこめしわが無名の詩はやや冗漫にすぎていたのだが、多くの作者は

桃太る夜は怒りを詩にこめて

とそれを引締めている。このようにイメージをちぢめたりのぼしたりして一つの作品を試作してゆくことは概成の歌、俳壇ではインモラルなことと受けとられるらしいが、しかし至極多くには当然のように思われる

「ロミイの代弁」の文末には「十二・二」と記されている。一九五四年十二月二日に執筆したのでろう。「チエホフ祭」が『短歌研究』一九五四年十一月号に「第二回五十首応募作品(十代作品特集)特選」と発表されて幾ばくも経ずして、寺山は「チエホフ祭」への批判と向き合っていたのだ。こういった批判にさらされたことが、以後の創作活動にどういった影響を与えた

か、推量させなくもない。が、小稿冒頭に引用した、塚本が「彼が作中人物通りではなかつたと睨を決して短歌のモラルを説いたり、用語に先蹤ありとあげつらつて、博覧ぶりを誇示した頑なな先輩たちを前に、途方に暮れつつ憫笑を以て応へてゐた寺山修司を、私はいたましい思ひにみちて想ひ出さねばならぬ」と記した一節を追想することはできるだろう。

ところで、「五十首応募作品」を選考し、『短歌研究』の編集責任者を務めた中井英夫（一九二二～一九九三）も「チエホフ祭」にまつわる寺山批判について『黒衣の短歌史』（潮出版社、一九七一年）に次のように書き残している。

寺山修司の登場には、初めのうち既成歌人はおおむね好意的だった（中略）それでも次にあげる、杉浦明平のような批評をする人がいなかったわけではない。《「チエホフ祭」という五十首はほとんど意味を解しがたかった。ここで用いられているさまざまテクニクは全く抒情を形成するのに役立つていない》そして寺山の作品に、実は俳壇の中村草田男、西東三鬼、秋元不死男、大野林火らの作品のみごとな焼直しや複写があると判明してからというもの、すさまじいまでの罵言が雨あられと降りそそいだ。「短歌」の方ではそれみたくかと、模倣小僧あらわる」と揶揄し、

「俳句研究」は三月号（引用者注「一九五五年二月号」）にわざわざ特集を組んで盗作問題を追及した

さらに中井は『寺山修司青春歌集』（角川文庫、一九七二年）の解説に、寺山をデビューさせるにあたって如何なる配慮を必要としたか、当時の歌壇の状況も加えて、次のように回顧している。

一九五四年前後の歌壇については（中略）前年の斎藤茂吉・釋迢空（折口信夫）という二巨匠の死で、歌壇は日月ともに限ちたほどに暗い沈黙を迎えていた。氾濫するのはおびただし中高年齢歌人の身辺雑詠にすぎず、新人らしい新人は塚本邦雄と葛原妙子の二人だけ（中略）老舗の「短歌研究」では新人の五十首を一般から募集したが、編集長の私は初めからその成果をあてにはしていなかった（中略）新人五十首の第一回、四月号に私の推した中城ふみ子「乳房喪失」は同じく六月号の「短歌」に川端康成の推薦で『花の原型』が飾られるに及んで評価を一変し、歌壇の長老がどう罵ろうとも、その声をかき消すまでに無名の短歌大衆から圧倒的な支持を受けるに至った。第二回の応募作品は前回の四百通の約倍ほどの投稿が寄せられ、私はその中から寺山修司を特選に、同じく十代だった他の数氏を並べて

十一月号を飾った。これらのことを私が何のためらいもなくしたのなら、眼識の高さを誇ってもよいだろうが、そうではない（中略）五十首を募集しておきながら、それをそのまま出したことは一度もない。添削だけは絶対にしなかったが、中城では七首を、寺山では十七首も削って、残りの作品だけを活字にしたのである。というのは当時の歌人のあらかたが、保守というも愚か、新人に対しては最大の罵声を放つことを楽しむ風潮さえあったからで、その攻撃的になりそうなものはあらかじめ取り除いておこうというのが私の発想だった

中井が「当時の歌人」に抱いていたであろうところも含めて、読み取ることができるだろう。

小稿に取り上げるのは、寺山修司が歌壇デビューを果たした短歌連作「チェホフ祭」である。寺山は「父還せ」と題した四九首を提出したが、中井によって「チエホフ祭」と改題された。寺山のデビュー作は、中井の選歌と改題とが加えられ、「チエホフ祭」三四首として『短歌研究』誌上に発表された。しかし、寺山自身は「チエホフ祭」を自らが編集する歌集に収録するにあたって、改変ともいふべき変更を加えていく。「チエホフ祭」に収録されていた「煙草くさき国語教師が言ふときに明日とい

う語は最もかなし」という一首、これは寺山の短歌のなかでも人口に膾炙するが、この一首についても、収録する連作そのものに変更がなされる。小稿は「チェホフ祭」を課題として、その編集・改変について再考するものであり、とくには「煙草くさき国語教師」の一首について読解を試みる。近年、堀江秀史『ロミイの代弁 寺山修司単行本未収録作品集』（幻戯書房、二〇一八年）が出版されたことで「寺山修司が巻き起こした「模倣問題」に関わる作品等を中心に九篇」が採録されるだけでなく、その「収録作品解題」に「俳句研究」一九五五年二月号に特集された「短歌と俳句」が寺山を一方的に非難したものでない、さらには「従来の寺山論では、模倣の文脈と「不当な」批評が強調されてきた。従来の寺山論で問題の本質と云える部分」が捨象されてきたのは、「特選」を与えた当の本人である中井英夫の影響が大きいだろう」と「俳句の模倣問題」を新たな視点をもって再考するべく、問題提起もなされた。また『短歌研究』二〇一七年四月号には、中井没後に本多正一（一九六四〜）によって発見された、寺山が中井に送った書簡とメモ書きも紹介されている。これら最新の情報を加えて、寺山の歌壇デビュー「チエホフ祭」を再び読解しようとするれば、如何なる問題を提起することができるだろうか。小稿に「チエホフ祭」を再考

する所以である。

一、「チエホフ祭」の誕生をめぐって

まず『短歌研究』一九五四年十一月号から「第二回五十首応募作品《十代作品特集》特選」として発表された「チエホフ祭」三四首を引用する。なお中井は、寺山が『短歌研究』に提出した原稿を保管していた。中井が没した現在も、その全容を目にすることができるといふのは奇跡的である。寺山が提出した原稿に確認されることの一つは、使用漢字の字体である。寺山は新字体を使用しており、『短歌研究』誌上に使用される旧字体さらには旧仮名使用をほぼ踏襲していない。ゆえに以下も新字体をもって引用を行う。

青い種子は太陽の中にある ソレル

アカハタ売るわれを夏蝶越えゆけり母は故郷の田を打ちてゐむ
かわきたる桶に肥料を満すとき黒人悲歌は大地に沈む
慕の子の跳躍いとほしむごとし田舎教師にきまりし友は
音立てて墓穴ふかく父の棺下ろさる、時父目覚めずや
亡き父の勲章はなを離さざり母子の転落ひそかにはやし

蜜声をあげて九月の森にいれりハイネのために学をあざむき
小走りにガードを抜けて来し靴をピラもて拭ふ夜の女は
篝火を床に踏み消して立ちあがるチエホフ祭の若き俳優
チエホフ祭のピラの貼られし林檎の木かすかに揺る、汽車通る
たび

籠の桃に頬痛きまでおしつけてチエホフの日の電車に揺らる
勝ちたるに嘲われいたる混血児まつ赤に人參土中にとれ
向日葵の下に饒舌高きかな人を訪わずば自己なき男
勝ちて獲し少年の日の胡桃のごとく傷つきいるやわが青春は
西瓜浮く暗き桶水のぞくとき還らぬ父につながる想ひ
非力なりし諷刺漫画の夕刊に尿まりて去りき港の男
この家も誰かゝ道化者ならむ高き塀より越え出し揚羽
桃太る夜はひそかな小市民の怒りをこめしわが無名の詩
啄木祭のピラ貼りに来し女子大生の古きベレーに黒髪あまる
日がさせば粉殻が浮く桶水に何人目かの女工の洗髪
列車にて遠く見ている向日葵は少年が振る帽子のごとし
向日葵は枯れつつ花を捧げをり父の墓標はわれより低し
ころがりしカンカン帽を追うごとく故郷の道を駈けて帰らむ
バラツクのラジオの黒人悲歌のバス広がるかぎり麦青みゆく
わが天使なるやも知れぬ小雀を撃ちて硝煙嗅ぎつつ帰る

煙草くさき国語教師が言ふときに明日という語は最もかなし
黒土を蹴つて馳けりしラグビー群のひとりのためにシヤツを繼
ぐ母

首飾りは模造ならむと一人決めにおのれなぐさむ哀れなロミオ
草の笛吹くを切なく聞きており告白以前の愛とは何ぞ

一粒の向日葵の種まきしの方に荒野をわれの魔女地と呼びき
叔母はわが人生の脇役ならむ手のハンカチに夏陽たまれる

包みくれし古き戦争映画のピラにあまりて鯖の頭が青し
夾竹桃咲きて校舎に暗さあり饒舌の母をひそかににくむ

そ、くさとユダ氏は去りき春の野に勝ちし者こそ寂しきものを
哀火を樹にすり消して立ちあがる孤児にもさむき追憶はあり

〔「短歌研究」誌上には「埼玉縣川口市幸町一ノ三九坂本方。

歌歴皆無なりしも十月「荒野」に参加。昭和十一年一月青

森に生る。早稲田大学教育學部一年」と、寺山の履歴など

付記するが、寺山の原稿には「埼玉縣川口市幸町一ノ三九

坂本方。歌歴皆無。昭和十一年一月青森に生る。早稲田大

学教育學部一年。」とあるのみ。「十月「荒野」に参加」は

中井によって加えられたのだろう)

寺山が提出した短歌連作「父還せ」四九首の原稿には、「父還

せ」と記された冒頭、その題が記される箇所には、原稿用紙を短
冊状に切った紙片が貼り付けられている。その紙片には、中井
の筆跡と覚しい文字で「チェホフ祭」と記されるわけだが、近
年、中井による選歌と改題とに、寺山が積極的に関わっていた
ことを読み取らせる、寺山から中井に宛てたメモ書きが発見、
紹介された。寺山が中井から改題について相談されていたこと
を、二人で改題について話し合っていたことを、そして寺山自
身が改題について了解していた事実を確認できる。

中井様

※「へ」は「に」の書きちがいでした。

※「チェホフの日」と、僕もしたかったのですが、致し方な
いでしよう

「チェホフ祭」でもかまいません。

※「短歌研究」の勇氣に沿ふべく

中城ふみ子のあとをがんばります

期待には必ず背きません

※とり急ぎ、ありがとうございました

寺山修司

中井は「第二回五十首応募作品」を発表するにあたって寺山と面談している。日本短歌社に寺山を呼んだという。中井は寺山と初めて会った日のことを『黒衣の短歌史』に書き残しており、また中井とともに『短歌研究』編集にあたっていた杉山正樹（一九三三～二〇〇九）も、

私の脳裡には、ふたりが出会った時の表情がありありと浮かびます。はにかんだような薄笑いを頬にうかべた寺山の顔と、一瞬、言葉をうしなつた中井のちよつと上気した眼鏡の顔。中井英夫は男惚れする性癖で、目鼻立ちあざやかな長身の少年に、たちまち魅了されてしまったのでした

と、随分後年になってからだが『寺山修司・遊戯の人』（新潮社、二〇〇〇年）に記した。杉山は同書に、中井が寺山に太宰治（一九〇九～一九四八）の面影を重ねていたエピソードも伝えていいる。さて寺山が提出した原稿用紙には「推」の文字が記されている。中井は寺山の短歌連作を「推薦」とするか「特選」とするか躊躇していた。しかし中井は寺山と面談し、その面談をもつて「特選」とすることを決定した。先に引用したメモ書きは、この面談の直後に、寺山が中井に宛てて記したものだろう。短歌連作の改題について、二人が話題としていたことを読み取らせる。寺山が提出した短歌連作「父還せ」は中井によつ

て「チエホフ祭」に改題され、さらに四九首中十五首を削除され、発表されたのである。では中井が削除した十五首とは如何なる短歌であつたろう。中井によつて削除された十五首を次に引用しておく。

むせぶごとく萌ゆる雑木の林にて友よ多喜二の詩を口づさめ
作文に「父さんを還せ」と書きたりし鮮人の子も馬鈴薯が好き
ペダル踏んで大根の花咲く道を同人雑誌配りにゆかむ
巨いなる地主の赤き南瓜など蹴りてなぐさむ少年コミニスト
友のせて東京へゆく汽笛ならむ夕餉の秋刀魚買ひに出づれば
塩つけて甘薯を食らふ日々だにも文芸恋へり北国の男
漬樽をまさぐりながら詩のために家出せむこと幾度思ひし
みじめなまで学問のみが太るといふ進学の友の髭をかなしむ
雀来る朝の竈を焚かむとて多喜二祭りのピラ丸めこむ
鉄屑をつらぬき立ちて芽吹ける木唄よ女工の群にも生れよ
山小舎のラジオの黒人悲歌聞けり大杉に斧打ちいれしま、
桃浮かべ小川は墓地をつらぬけり戦後の墓に父の名黒し
帰省せるわれの大学帽などをけなしておのれなぐさむ彼等よ
蔑切の啼ける日なたへ急がむ戦後のわが影放浪型に
暗がりに母の忘れし香水あり未亡人母の恋はおそろし

削除された十五首には、故郷で過ごした少年期が詠まれている。「多喜二の詩」「巨いなる地主」「少年コミニスト」「女工の群」「黒人悲歌」といった詞に象徴されるプロレタリア短歌的な詠、そして何より、地方の農村に過ごした少年時代、貧困を連想させる仄暗さを孕んだ情景が詠み込まれる。中井はこの削除について「何より私の案じたのはこれをそのまま出したとき、いかにも田舎の文学少年らしい稚さという評価がすぐに下され、そしてそれが決して賞め言葉とはならないことを知っていたから」と語った（前掲『寺山修司青春歌集』解説）。そして「父還せ」と題する所以であったろう「作文に「父さんを選せ」と書きたりし鮮人の子も馬鈴薯が好き」も削除した。中井が改題を提案したのは必然であったわけだが、結果として「父還せ」と題された、戦争の傷跡を負いつつ地方で少年期を過ごした青年の社会詠連作は、塚本が「寺山修司のデビューは、作品のサブ・タイトルとした、青い種子は太陽の中にある」をそのままの、燦燦たる光に包まれた、戦後九年目の希望の象徴であった。老朽ちようとする韻文定型詩は、まさしくこの寵児の青春の声によつて、一夜にして蘇つた」（前掲「アルカディアの魔王」と賞賛した、青春詠連作三四首に生れ変わったのだった。

ただし中井が寺山と面談した後、寺山自身から次の願い出があった。一首を差し替えることを、寺山は願い出たのだ。そして寺山の願い出によつて差し替えられた一首というのが「煙草くさき国語教師が言ふときに明日という語は最もかなし」だったのである。この一首に差し替えられた事情についても、先のメモ書き同様、近年発見された寺山から中井に送付された「昭和二九年十月二六日消印、寺山から中井宛ハガキ」ならびにメモ書きによつて確認できる。

ふたたびお便りします。

今日ー僕の古い詩歌スクラップノートをペラペラやっていると東京三氏の俳句に

鳥渡るコキコキと缶切れば
というのが見つかりました。

僕の「わが下宿へ」と類想なので
文芸のパターン上神経質な僕としては
ひどく気になりました。あの歌は
無意識のうちに前の句が記憶の中で
解つて出来たのかも知れないと思われま

それで僕の良心に賭けて作品系列

から抹消したいと思ひ、ここに

お通知いたします。あの歌よ失くなれ（以下略）

「メモ書き」

この中から一首（コキコキ）を抜いて

入れ替えて下さい

古書売りしいかりを誰に訴えむ頬を桜の吹きすぐる夜は

言い負けて風の又三郎たらむ希ひをもてり海青き日は

さはあれど倅せあらむ吊るされて納屋に芽ぶきしにんにくの色

○煙草くさき国語教師が言ふときに明日という語は最もかなし

／チェホフを演ると決まりし放課後は椋鳥の巢にあふれる日ざし

林檎の木ゆさぶりながら案じいぬ同人詩誌の赤字のことを

○ラグビーの補欠のわれが海岸へ来てはてらしむ頬傷なりし

ノラ演りて風邪声なりし君のことは母に語らずあたたためいたる

寺山は「わが下宿に北へゆく雁今日見ゆるコキコキと缶詰

切れば」を削除することを中井に願ひ出た。寺山はこの一首が、

東京三つまり秋元不死男の「鳥渡るこきこきと缶切れば」

（句集『瘡』作品社、一九五〇（昭和二五）年）に「類想」す

ると指摘しており、それを理由に削除を願ひ出たわけだが、こ

の一首の削除をめぐることは、寺山自身が「俳句の模倣（盗句歴

然たる模倣）」であると批評される可能性を予測していたこと

を、そしてそういった批判を回避しようとしていたことを確認

させる。加藤治郎「全力の短距離走」（『短歌研究』二〇一七年

四月号）は、寺山の記した「文芸のパターン上」というのが「文

芸の型、規範という意味合いだろう」と、そして寺山が「ルー

ル違反と認めている」と指摘する。だとすれば、中井との面談

で「俳句の模倣」に関する何らかの話題がなされていたことも

推量させる。寺山が俳壇で活躍していたことに鑑みれば、寺山

の俳句について、そして寺山が提出した短歌連作と俳句とに類

似性さらには相違性とを指摘できるか否かなど、二人の話題に

あがっていたとしても不思議ではない。そして寺山は削除する

一首の差し替えを願うべく、中井に新たな八首を送り選歌をゆ

だねる。中井に選歌を願ったことには、寺山が「父還せ」と題

して提出した四九首を十五首も削除されたことに納得していた

ことを指摘させる。寺山は、中井の改題と選歌とを深い信頼を

もって受け入れていたのだ。そして中井が思い描く新たな短詩

型文藝界が、寺山を魅了し憧れにも似た感情をもたらししていた

ことを推量させる。中井は、寺山が提出した八首のなかから「煙

草くさき国語教師が言ふときに明日という語は最もかなし」を
選歌し、「チエホフ祭」三四首を整えることになる。寺山が新
たに提出した八首には、すでに提出していた青春詠と共通する
モチーフや「チエホフ祭」と題するにふさわしい短歌が連ねら
れている。中井の選歌を意識した、つまり中井が「父還せ」か
ら「チエホフ祭」に整えるに至った事由を意識した八首を提出
したと指摘できる。中井と寺山とが、一首づつ、評をしていた
であろうことも推量させよう。

とはいえ、近年発見された寺山から中井に宛てた書簡には、
中井が寺山のデビューに危惧を抱いていたことも、そしてこの
危惧に対する、寺山の素直なまでに若き意欲も読み取らせる。

本日は大変失礼しました。

僕、つまらないことべらべらしゃべったようで

――しかし大変愉快でした。

中井さんの御心配は、旧勢力へ

一たん点火してから実作がそれに伴なわなかったら、、、

ということだろうと思います。

首だけ前へ出して足が前のところへ根のように

くっついていた、なんていうのはこっけいですから。

そこで、旧勢力を打ちこわすために僕も
一騎兵（あえて一兵卒とはいいません）として、一生
懸命やろうと思います。ひたすらに。

これは例えば尾山センセイのほほえましい一論
文に対してだけでも価値がありそうです。

今、酔いがさめてガクゼンと孤りです。

写真、二、三日中にお渡しします。

作家志望とカードに記入しながら 短詩

にすがりついている僕―きりぎりす。

とにかく一応 信頼してみてください。

当たるクジ。

僕が心配なのは座談会で皆がどんな風

なことを言いあうことができるか、という一事のみ

です。中城氏を買っていない「歌壇の卵」と

短歌を知らない僕が喜劇を演じるような

Discussするのではないか。

首狩り賊などといいますまい。

孔雀の羽をつけた鴉で結構。とにかくも

「ひたすら」という語の中にもぐりこみます。

中井さんにあつて安心しました。

寺山修司（以下略）

この書簡が、中井と面談したその日に認められたことは確かだろう。寺山が自らの短歌について、そして自らを揶揄するように語るのには、中井が面談のうちに話題とした「当時の歌人のあらかた」の状況に所以する。寺山が自らを「短歌を知らない」と記したのは、短歌結社に所属しておらず、結社に所属することと有力歌人に師事するという、歌壇における一般的な経歴として歌歴を持たないことを意味する。「当時の歌人のあらかた」の事情については、杉山が『短歌研究』の編集を勤めるにあたって必要とされたことを記した、次の文章が参考になる。

私が一九五二（昭和二七）年に日本短歌社に入って、社長の木村捨録からまず最初に命じられたのが、短歌結社の系統図をおぼえることでした（中略）あらゆる結社とその系統、そこに所属する主要歌人の作風を記憶しました。実際、そうでなければ、短歌総合誌の編集はできなかったのです。それほどにも、短歌の結社組織は強固で、たとえば戦後派歌人を代表する近藤芳美は、師弟関係ではない自由な同人集団の「未来」を率いていましたが、かれがいち早く歌壇に認められたのは土屋文明の直系だからだ、とは木村社長

の説で、おなじく戦後派の宮柊二は白秋の秘書だったし、佐藤佐太郎は茂吉の岩波書店での担当者だったとも教えてくれました

寺山の登場は、そういった歌壇の状況（歌人が育成されていく過程）からは異質であり、そういった状況に新たな息吹を吹き込む可能性であったのだろう。寺山との面談をとおして、中井の期待は膨らんでいったに違いない。短歌総合誌の新人賞が歌人にとって登竜門となるという、歌壇における新たな仕組みも発想したのではなからうか。中井が『短歌研究』誌上に募集した「五十首応募作品」を自ら選考したというのも、新たな試みであったわけだが、中井の期待に應えるべく、そして中井との約束を果たすべく、寺山は『短歌研究』誌上に短歌連作を発表していく。一九五四年にネフローゼを発病し、一九五五年から一九五八年夏頃まで、三年にわたって入院生活を余儀なくされた、その入院生活の間にも、寺山は作歌活動を続けており、一九五八年には、入院中に編集を終えた第一歌集『空には本』（的場書房、一九五八年）を出版する。『空には本』には既発表の短歌連作を中心として「燃ゆる頬（森番）」「海の休暇」で構成）「記憶する生」「季節が僕を連れ去ったあとに」「夏美の歌（空の種子）」「木や草のうた」「朝のひばり」で構成）「チエホ

フ祭「冬の斧」「直角な空に」「浮浪児」「熱い荳」「マダムと薔薇と黒ん坊と」「少年」「蜥蜴の時代」「真夏の死」「祖国喪失」を収録する。一方、中井は一九五五年十二号をもって『短歌研究』の編集責任者を辞す。日本短歌社を退社したのだ。『短歌研究』の編集責任者は一九五六年から杉山正樹に引き継がれ、杉山もまた寺山を篤く待遇した。寺山は『短歌研究』誌上にデビューを果たした新人として、有力歌人たちに並んで短歌連作を発表し、毎年掲載される代表的歌人の自選歌にも、一九五四年以降その名を連ねている。

二、「煙草くさき国語教師」をめぐる

さて、中井の選歌によって「チエホフ祭」に加えられた「煙草くさき国語教師が言ふときに明日という語は最もかなし」という一首は、近年、寺山の恩師であった中野トク（一九二一～一九九九）をモデルとすることが指摘されるほか、寺山が早稲田大学教育学部国語国文学科に入学したことを根拠に、寺山自身が未来における自らを詠んだと解釈されるなど、さまざまに読み解かれている。葉名尻竜一『寺山修司』（コレクション日本歌人選040、笠間書院、二〇一二年）は三九首選だが、「煙

草くさき国語教師」の一首を四首目に取りあげ、中野トクと寺山との交流を紹介するとともに、寺山自身が早稲田大学教育学部国文学科に入学したことも紹介して、寺山の履歴を根拠とする解釈を展開した。中野トクの実在は、小菅麻起子・九條今日子『寺山修司 青春書簡―恩師・中野トクへの75通』（二玄社、二〇〇五年）に、寺山が中野に送った書簡を公刊したことで鮮明になった。中学校の国語教師であった中野を連想することの根拠は、寺山が『全歌集』を編集するにあたって「煙草くさき国語教師」の一首を収録する「初期歌篇」に「一九五七年以前、高校生時代」と加筆したからだろうか。また一方で、岡井隆（一九二八～）はこの一首について、次のような解釈を提示する（『岡井隆の短歌塾 入門編』角川学芸出版、二〇一二年）。

「煙草くさき国語教師」というような言い方です。ここには多少批判的な口調があります。なまいきな学生が教師を
見ている。あの感じですね（中略）「明日」という言語を強
調して教師が言っている。素直にとれば、先生がそう言う
ので、自分たちは勇気づけられたという歌が出来てもいい。
でも、若い鋭い批判的な学生は、なんだあの教師は、あんな
綺麗ごとと言って、と反撥し、ときにあの先生は煙草くせ
えじゃないか、と言うんですね。こういうところに現実味

がある。少し下から相手を見ている。やや批判的に皮肉な形で見ている。そこに、一種の親近感もあるんですね

岡井は寺山を紹介しつつ、しかし寺山の伝記を踏まえることなく、一首そのものに向き合った解釈を展開する。歌人らしい評であり、短歌を詠むために必要な視点も提示する。現代短歌には三十一字という文字数の制約があるため、多くを表現することが難しい。ゆえに読者は自由な解釈を許される。読者による解釈の多様性は、現在さまざまに開催されている歌会（短歌を披露し、評する場）においても通用している。寺山が中学校あるいは高等学校時代の経験に基づいて詠んだとしても、自らを表現世界に導いた恩師・中野トクをモデルとしたとしても、さらには自らの未来を想い描いて詠んだとしても、一首の解釈は成立する。しかし前章に確認したように、この一首は「チエホフ祭」を整えるにあたって、寺山が新たに提出した八首のうち「チエホフ祭」に収録された経緯に鑑みるとすれば、その解釈に、中井が書き残した感慨（前掲『寺山修司青春歌集』解説）を無視することはできない。中井は自らが「田舎の国語教師」であったと、次のように告白している。

十代の少年の内部自体をこれほど明るく懐かしく映し出し

たという例はかつてなかった。もつとも、

とびやすき葡萄の汁で汚すなかれ虐げられし少年の詩をとか、

知恵のみがもたらせる詩を書きためて暖かきかな林檎の空箱

といった歌になると、うますぎて舌を巻くと同時に、

煙草くさき国語教師が言うときに明日という語は最もかなし

と歌われたその国語教師めいた思いがしてがっかりもし、小にくらしい気さえしてくるほどだが、事実私は寺山修司の登場の折、田舎の国語教師めいた立場にいたのだった（中略）寺山の場合は、それ（引用者注：中城あや子の場合）と意味は違っても、私の田舎教師めいた心配はつるるばかりで、原作の「父還せ」は次のような配列で始まっていたが、私は表題を「チエホフ祭」と変え、最初の一首を残し、次の四首をあつさり削ってしまった

先に引用した「チエホフ祭」誕生と、当時の歌壇をめぐる中井の回想は、この「煙草くさき国語教師」という一首の「作品の理解のために、当時の事情の若干を記しておこう」と記述される後に書き連ねられている。中井は自らが「田舎の国語教師め

いた立場」によって寺山の短歌連作に、そして寺山自身に向き合ったことを書き残したのだ。中井にとって寺山が詠んだ「煙草くさき国語教師」さらには「国語教師が言うときに明日という語は最もかなし」という感情は、中井自身であり、中井自身の感情だったのだろう。寺山から新たな八首を提示され、選歌をゆだねられるにあたって、中井がこの一首を選歌した理由が暴露されているわけだが、二人で語った日本短歌社二階の一室における話題とも関わって、寺山が中井との面談を背景に詠んだ一首であると、少なくとも中井は解釈していた。そして寺山自身も、中井に宛てた書簡の一通を次のように結んでいる。

月夜かもしれない。

今——ノートに素直でない歌を作り、そして消してしまつたところ。五十首詠は母がよろこんでくれました

十一月号三部ほしいけど、ただけなないですか。

だめなら買います。せめて故郷の「煙草くさき教師への贈りもの」

——僕はいつもこれなんだ。

この書簡に記された「五十首詠」とは「チエホフ祭」であり、「十一

月号」とは「チエホフ祭」が掲載された十一月号である。そして寺山が「煙草くさき教師」と表現したのは、故郷の中学校や高等学校で教鞭をとる国語教師すなわち寺山の恩師、具体的な人物を対象とするものではない。「煙草くさき国語教師」という一首を詠むに至った、中井との面談をイメージさせる、いわば寺山が創作した歌語であつたと、私は読み解く。寺山は「煙草くさき（国語）教師」と詠み、表現すれば、中井も自らと同じイメージを抱くことを識っていた。寺山は中井に宛てたこの同じ書簡に「もうどうにもならんのだからじゃんじゃん作り、しゃべり僕の大部分をこの時期の短歌革命に賭けてみます。「必敗」とか「阿片」などとは言つて下さいますな」と記している。寺山が中井に共鳴し「チエホフ祭」と題する短歌連作を発表することで、当時の歌壇に何を提起しようとしていたか、その限りなく若い表現者の意欲を読み取らせる。

三、「チエホフ祭」を改変する意図

ところが、短歌連作「チエホフ祭」は、寺山自身によって改変されていった。「チエホフ祭」の改変は、『短歌研究』一九五四年十二月号に掲載された「本年歌壇問題作品集（自選

二十首) (短歌結社の代表を含む二十名の歌人が自選歌二十首を連ねる) に始まる。寺山は「チエホフ祭」三四首から二十首を選歌した。寺山(あるいは中井であったかもしれないが)は「俳句の模倣(盗句歴然たる模倣)」であると、とくに指摘・非難された、

かわきたる桶に肥料を満すとき黒人靈歌は大地に沈む

向日葵の下に饒舌高きかな人を訪わずば自己なき男

わが天使なるやも知れぬ小雀を撃ちて硝煙嗅ぎつつ帰る

そ、くさとユダ氏は去りき春の野に勝ちし者こそ寂しきものを
真火を樹にすり消して立ちあがる孤児にもさむき追憶はあり

を含んだ十四首を削除する。「俳句の模倣」を指摘される九首から七首を、「寺山自身の俳句の再構成」と指摘された七首からは二首を削除したのだ。「チエホフ祭」の変更が「俳句の模倣問題」を意識し、この批評に向き合うところから始まっていることを確認できる。つまり「俳句の模倣問題」は寺山にとつて、『俳句研究』一九五五年二月号に掲載された特集「短歌と俳句」が意図するところではなかったとしても、自らへの非難でしかなかったのだ。しかし寺山は『短歌研究』一九五四年十二月号に

掲載する二十首を自選するにあたって削除した短歌、さらに言えば「俳句の模倣」であると批判された短歌を第一作品集『われに五月を』(作品社、一九五七年)や第一歌集『空には本』(的場書房、一九五八年)に収録する。寺山が「俳句の模倣問題」に回答すべく、検討を加えた結果であったと指摘したい。

ところで「チエホフ祭」の変更については、『寺山修司全詩歌句』「編注」(思潮社、一九八六年)に指摘されるほか、小菅麻起子「初期寺山修司研究」「チエホフ祭」から『空には本』(翰林書房、二〇一三年)と『短歌研究』二〇一七年四月号に掲載された「寺山修司「チエホフ祭」の変遷」に詳細である。小菅の著作は、寺山が歌壇デビューを果たした一九五四年から第一歌集『空には本』を出版する一九五八年に至る作歌活動を課題とする。「父還せ」に収録されていた四九首の初出を調査するほか、『われに五月を』と『空には本』とが既発表の短歌連作を再構成した方法についても確認する。「チエホフ祭」に収録された短歌が如何なる連作に再録されていくかについても収録歌数をもって明らかにしている。一方『短歌研究』に掲載された「寺山修司「チエホフ祭」の変遷」は、中井が削除した十五首を含めて、つまり寺山が提出した「父還せ」を公刊する。『空には本』に収録される「チエホフ祭」と「父還せ」との異

同、すなわち中井によって削除された短歌が『空には本』に再録することも確認できる。「寺山修司「チェホフ祭」の変遷」は、『短歌研究』が企画した特集「新発見 寺山修司から中井英夫への手紙」に掲載される。「チェホフ祭」の形成と改変を新発見資料も加えて提示するほか、この特集には、寺山に続いて「短歌研究新人賞」を受賞した歌人たちが新発見資料に関する「コメント」を執筆する（前掲、加藤「全力の短距離走」もその一つ）。一首一首を提示しながら、寺山の短歌を読み解こうとする姿勢に貫かれ、寺山の短歌が戦後短歌史にもたらした影響、その新風たるが、実作者として活躍する現代の歌人たちに如何なる影響を与えたか、考えさせられる。が、いづれにしても短歌連作「チェホフ祭」さらには寺山の短歌について課題とするには、収録する連作を変更する理由を含めて、一首ごとに背景を調査し、またその背景も踏まえて十分に読解を加える必要がある。それゆえ小稿では「煙草くさき国語教師」の一首を取りあげ、考察を進める。「煙草くさき国語教師」の一首は、中井が寺山から選歌をゆだねられ、寺山が中井との面談をイメージして詠んだと中井自身が解釈した、この連作において注目すべき一首だからである。

まず第一作品集『われに五月を』（短歌連作「森番」「真夏の

死」「祖国喪失」を収録）は「煙草くさき国語教師」の一首を「祖国喪失」と題する連作三四首に収録する。『われに五月を』に「チェホフ祭」と題する短歌連作が収録されていないのは「俳句の模倣問題」を受けて、この題を掲げなかったのだろう。ただし小菅による再録短歌教調査に詳細であるように、『われに五月を』には「煙草くさき国語教師」の一首に限らず、『短歌研究』一九五四年十一月号に特選と発表された「チェホフ祭」に収録された三四首中二四首と、中井によって削除された二首とを収録する。『われに五月は』の出版については、日本図書センターが出版する愛蔵版詩集シリーズの一冊として二〇〇四年に復刊された折りに、越山美樹が加筆した「解題」に「ネフローゼは当時死病であり、寺山も周囲も死を覚悟した（中略）中井英夫が、寺山の短い一生の記念碑にと作品社に斡旋し、寺山が病床で編集してできたのが本書である」とある。作品社の社主は田中貞夫（一九二二～一九八三）である。中井が寺山の著作を出版することを企画した状況も推量させる。寺山は一九五六年八月六日消印を有する中野トクに宛てた書簡に出版について報告しており、また同年八月三十日消印の同じく中野に宛てた書簡には原稿を入稿したことを伝えている（前掲「寺山修司 青春書簡―恩師・中野トクへの75通」）。出版に向けて編集・改変作

業を行った時期を推定させる。

一方、第一歌集『空には本』は「煙草くさき国語教師」の一首を「燃ゆる頬」と題する連作に収録する。「燃ゆる頬」とは『われに五月を』に俳句を収録するために用いた題だが、『空には本』では「森番」「海の休暇」で構成する短歌連作の題として用いられた。「煙草くさき国語教師」の一首は「森番」に収録されている。なお「森番」とは、寺山が『短歌研究』一九五五年一月号に特選発表後第一作として掲載した連作三十首の題である。寺山は『空には本』に「森番」を収録するにあたって、特選と発表された「チエホフ祭」から六首、さらに中井が「チエホフ祭」に整えるにあたって削除した一首も加えた、以下に引用する七首を収録する。

列車にて遠く見ている向日葵は少年のふる帽子のごとし
草の笛吹くを切なく聞きており告白以前の愛とは何ぞ
ペダル踏んで花大根の畑の道を同人雑誌を配りにゆかむ
煙草くさき国語教師が言ふときに明日という語は最もかなし
黒土を蹴って駈けりしラグビー群のひとりのためにシャツを編む母
蛩声をあげて九月の森に入れりハイネのために学をあざむき

ころがりしカンカン帽を追うごとくふるさとの道を駈けて帰らむ

なお『空には本』には「チエホフ祭」と題する連作二九首も収録する。「青い種子は太陽のなかにある ジュリアン・ソレル」と記した後に、特選と発表された「チエホフ祭」から十七首、中井が「チエホフ祭」に整えるにあたって削除した三首に、寺山が「煙草くさき国語教師」の一首とともに提出した八首からも一首加えた、次の二一首を収録する。以下は『空には本』に拠り、引用した。

一粒の向日葵の種まきしのに荒野をわれの処女地と呼びき
桃いれし籠に頬髭おしつけてチエホフの日の電車に揺らる
チエホフ祭のピラのはられし林檎の木かすかに揺るる汽車過ぐるたび

真火を床に踏み消して立ちあがるチエホフ祭の若き俳優
桃うかぶ暗き桶水替うるときの還らぬ父につながる想い
音立てて墓穴ふかく父の棺下ろさるる時父目覚めずや
向日葵は枯れつつ花を捧げおり父の墓標はわれより低し

桃太る夜はひそかな小市民の怒りをこめしわが無名の詩

啄木祭のピラ貼りに来し女子大生の古きベレーに黒髪あまる

包みくれし古き戦争映画のピラにあまりて鯖の頭が青し

叔母はわが人生の脇役ならむ手のハンカチに夏陽たまれる

暮の子の跳躍いとおしむごとし田舎教師にきまりし友は

山小舎のラジオの黒人悲歌聞けり大杉にわが斧打ち入れて

言い負けて風の又三郎たらむ希いをもてり海青き日は

この家も誰かゝ道化者ならむ高き塀より越えだし揚羽

むせぶごとく萌ゆる雑木の林にて友よ多喜二の詩を口ずさめ

バラックのラジオの黒人悲歌のしらべ広がるかぎり麦青みゆく

作文に「父を還せ」と綴りたる鮮人の子は馬鈴薯が好き

アカハタ売るわれを夏蝶越えゆけり母は故郷の田を打ちていむ

鉄屑をつらぬき芽ぐむポプラの木歌よ女工のなかにも生れよ

『空には本』出版以後、「煙草くさき国語教師」の一首は「燃ゆる頬」を構成する短歌連作「森番」に収録される。『全歌集』『寺山修司青春歌集』も同様である。しかし『全歌集』は「燃ゆる頬」を「初期歌篇」と題する新たな連作を設けて収録する。「初期歌篇」には「燃ゆる頬」の他にも「記憶する生」「季節が僕を連れ去ったあとに」「夏の歌」「空の種子」「木や草のうた」「朝

のひばり」で構成)「十五才」を収録し、その冒頭には「一九五七年以前 高校生時代」と加筆される。そして『全歌集』に収録する「空には本」の冒頭には「一九五八年」と加筆して、「チェホフ祭」「冬の斧」「直角な空」「浮浪児」「熱い茎」「少年」「祖国喪失(「壺」「忒」)」「僕のノオト」(「空には本」に加えられた「解説」)を収録する。さらに寺山は『全歌集』に「初期歌篇」を新たに設けただけでなく、「空には本」に年代を加えたように、既発表の歌集を収録するにあたって、それぞれの冒頭に年代を加筆する。年代を加筆することによって自らの歌歴を提示することを可能にし、さらに言うとすれば短歌連作をもつて自らの伝記を創作するという、新たな編集意図をも実現したと考える。なお『全歌集』に収録された「チェホフ祭」には「空には本」に収録された「チェホフ祭」と同じ短歌を収録する。寺山は『空には本』を出版するにあたって『短歌研究』誌上に発表した「チェホフ祭」を改変しただけでなく、「俳句の模倣」と批評された短歌を収録させており、そして何より「チェホフ祭」という題も復活させたのである。「俳句の模倣問題」、自らの批判・非難に向き合い検討した結果を提示するべく、『短歌研究』誌上に発表した「チェホフ祭」とは異なる、新たな短歌連作「チェホフ祭」を創作したと考えられる。そして『短歌

研究』誌上に特選と発表された「チエホフ祭」とは異なる、新しい「チエホフ祭」であることを印象付けるために、『空には本』を編集・改変し終えた「一九五八年」という年代が加えられただろう。「煙草くさき国語教師」の一首については、新たな「チエホフ祭」でなく「初期歌篇」に収録することで「一九五七年以前 高校生時代」つまり『短歌研究』誌上に特選と発表された一九五四年を印象付けることが可能となる。寺山は短歌連作によって自らの伝記を創作・完成させるにあたって、中井との想い出を秘めた「煙草くさき国語教師の言ふことに明日のいう語は最もかなし」を『短歌研究』誌上に発表した時点に留めおいたのではなかったか。想像に過ぎると非難を受けるかもしれないが、この一首を「初期歌篇」に収録した所以として提示しておく。

むすびにかえて『われに五月を』

さて寺山の第一作品集『われに五月を』は、短歌のほかにも俳句・詩・散文詩・叙事詩・日次をよそおった随筆など、実にさまざまな表現方法を用いた文芸世界を提示する。寺山は「俳句の模倣問題」によって、短歌と俳句とをめぐる短詩型文藝に

向き合わざるを得ない状況であったわけだが、『われに五月を』にさまざまな才能を披露しつつ、「俳句の模倣」であると批評される短歌に検討を加え、自らの俳句を短歌に再構成する「実験」に着手する事由を提示したのかもしれない。短歌と俳句とをめぐる寺山の「実験」は、戦後短歌史そして短詩型文藝に及んだ、あまりにも広大な問題を提起する。今後、実作者である歌人・俳人からも、そして勿論、研究に携わる立場にある者からも、それぞれの視点をもって考究されるべきであることを指摘しておきたい。

ところで小稿をとじるにあたって、引用しておきたいと思う文章がある。『短歌研究』誌上、寺山の短歌連作「チエホフ祭」を特選と発表した、その講評である。筆者はもちろん中井である。中井の寺山への評、寺山が詠んだ短歌への評は、寺山修司の短歌への、現代における評価を予見している。

前回（引用者注・中城ふみ子「乳房喪失」）と同じく、迷ひぬいた挙句の特選であるが、それにしてもなほ寺山修司氏には数多くの非難が予想される。しかしいかにも北の国育ちの少年らしい孤独と人恋しさとはやはり美しい。凡そ現代短歌らしからぬにしろ何よりも氏を持つ若さがこの形を必然としてゐる限りそれは美事といへるであらう。たと

へば今日の眼にそれがいかばかり不遜と映るにせよ、次の日、押広げられた展望の裡では何らの不思議も影を失せるに違ひない

(おおしま かおる／本学教授)